第18回

FENDI
豪奢なるローマの華

ローマが誇るファーがブランドルーツのフェンディ。82年の伝統を誇りつつも、常に〝革新的であること〟が大切なDNAのひとつ、だそう。
贅沢なファーを身近なものにし、昨今はバッグにも注目が。カール・ラガーフェルドとフェンディ家によって育まれ、進化している今を、紐解いてみました。

撮影／清水 尚　スタイリスト／菊地ユカ　ヘア・メーク／浩平〈HEADS〉　取材・構成／柳武麻実　デザイン／Fab

人生を彩る毛皮

中野香織

イットバッグ、すなわち持つだけで時流に乗る満足を与えてくれる「必携バッグ」の歴史に名を残す逸品に、フェンディのバゲットがある。

1997年、創業者の孫シルヴィア・ヴェントゥリーニが「機能か、見栄えか」で悩んだ末に「見栄え」を選んで創ったのが、小脇にかかえるフランスパン、バゲットにヒントを得たバッグだった。強いインパクトを放つ基本形が存在すれば、ロゴ、毛皮、ビーズ、デニムなど素材や技法を駆使して無限のバリエーションが生まれる（実に1,000種類を超えた）ことを証明したバッグでもある。

日本ではそんなバッグでなじみ深いフェンディだが、世界的には「毛皮のフェンディ」として知られる。創始者は1925年、ローマで小さな毛皮・皮革店をオープンさせ、娘5人が次々と参加して一流ブランドとして育て上げる。1965年に当時新進だったカール・ラガーフェルドが参加してから一気に国際的ブランドとして名を上げた。織り込み、エナメル加工などの斬新な技法を毛皮に施したばかりか、毛皮を紫、オレンジなど大胆な色に染色したり、モール（もぐら）、ウィーゼル（いたち）など、マイナーイメージの毛皮にファッショナブルな価値を与えたりした。つまり、フェンディは大昔からの退屈な毛皮の意味を破壊しつつ、毛皮をスリリングな高級モードに変えるという毛皮革命を起こした。

'90年代に毛皮着用が「動物虐待」としてバッシングを浴びるという逆境のなかにあっても、フェンディは出発点の毛皮にこだわり、「偉大なる母」たる創始者アデーレのアーカイヴを再現するという「挑戦」に賭けた。結局、この賭けにフェンディは勝ち、いまや毛皮は「オーガニックでナチュラル」な環境にやさしい素材として認知されるにいたっている。

人がモノに与える価値や意味のはかなさを手玉にとるかのように時代を創り、逆境を生き抜いたフェンディの毛皮は、21世紀のラグジュアリー市場でひときわ艶やかに輝く。

中野香織
服飾史家、コラムニスト。東京大学卒。ケンブリッジ大学客員研究員を経て執筆活動に。著書に『スーツの神話』『モードの方程式』が。

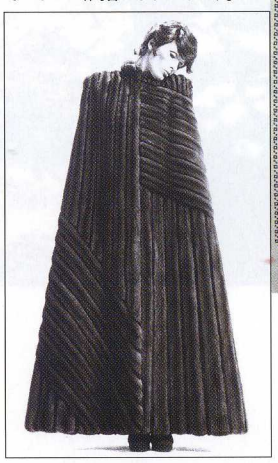
変わらぬハンドメイド魂

1995年に登場した、「セレリア（SELLERIA）ライン」は、熟練した職人の手作業の賜物。イタリア語で馬具屋という意味で、伝統的な馬具に使用される上質な革や製法から誕生。シリアルナンバー入りは、世界にひとつだけの証明。〈バッグ上から〉シナモンは新色。「SELLERIA MINI LINDA」（H16×W23×D11㎝）¥197,400「SELLERIA LINDA」（H27×W35×D15.5㎝）¥283,500「SELLERIA MIDEUM LINDA」（H23×W31×D12㎝）¥241,500（すべてフェンディ／フェンディ ジャパン）

進化するブランドSTORY

1925年、エデュアルドとアデーレという若いカップルがローマのプレビシート通りに、皮革・毛皮店をオープンさせたのがブランドの出発点。〝フェンディ〟の名は瞬く間に広まり、'60年代には夫妻の5人姉妹が仕事を手伝い発展。'65年にカール・ラガーフェルドと出会い、デザイナー（現在も）として起用。クラシックだった毛皮の概念を覆し、ニッティング、パッチワークなどの新しい手法を生み出していく。'60年代後半にはアメリカに進出し、絶大な支持を得、日本にも上陸し、'70年代にはFF柄のバッグ、'97年にはフェンディ家3代目のシルヴィアが考案した「バゲット」がブームに。21世紀を迎えたころ、LVMHグループとビジネスパートナーに。80周年を迎えた2005年には、ローマに本店、本社、クリエイティブ・アトリエの機能を持つパラッツォ・フェンディがオープン。ファッション、バッグのヒットも相次ぐ一方、インテリア、子供服、香水（海外先行発売）なども充実し、ライフスタイルブランドとして拡充している。

'71年にコレクションで発表された、ミンクならではの毛質を生かした、ファーの美しいマント。右がカール・ラガーフェルドによるデザイン画。職人たちが、いかにイメージどおりに作り出すか研鑽しているかが、両者からわかります。



〈写真左〉1925年にオープンした1号店はローマのプレビシート通りに面していました。

〈写真右〉「セレリア」のバッグは、フィレンツェ郊外の工場で長い経験を積んだ職人が、ひと針ひと針丁寧に手作りで仕上げていきます。